

---

# そのヒーロー、ただいま就活中

gujin

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そのヒーロー、ただいま就活中

### 【Nコード】

N2694Y

### 【作者名】

gugin

### 【あらすじ】

その青年はある力を持っていた。その力はヒーローの力。しかし青年にとっては過去の憧れ、そして今は呪いともいうべき力だった。なぜなら怪人が現れる度に職場放棄しなくてはならないからだ。故に青年は探す。自分が安心して働ける職場を。

そのヒーロー、失職中（前書き）

例によって駄文です。

それでもokなひとだけどうぞ。

## そのヒーロー、失職中

小さなビルの事務所で二人の男が向かい合っている。

「悪いけど、何度も何度も無断でいなくなっちゃこっちも困るんだよ」

「すみませんでしたっ！」

以後気をつけますんでどうかっ！」

「普段はまじめに働いてくれてるけどね、うちも商売やってるみだからいつ消えるかわからない奴をいつまでも雇ってる余裕はないのよ。」

わかる？」

「そこを何とかお願いします」

あわてて土下座をするが、

「悪いけど、明日から来なくてもいいよ。」

これは今日までの給料ね」

封筒を土下座する男の前に置くと部屋から出て行ってしまった。

土下座していた男はしばらくそのままの体勢でいたが少しすると黙って立ちあがり封筒を拾うと事務所を出て行った。

「はあ、これで何件目だっけな。

クビになったの」

そのままふらふらとあてもなく歩く。

「はあ、なんでこんなにもうまくいかないかなあ」

部屋の家賃も滞納したままだから早く次の仕事を見つけなくては、いずれは追い出されて晴れてホームレス生活になってしまうかもしれない。

「今となつては疎まれても食事は確実にとれたあの家での生活が懐かしい」

両親を早くに無くして親戚の家で生活。

残念ながら嫌々引き取られた先での生活は辛いモノばかりだったが、現在進行形で食うのも困りそうな今では惜しく感じている自分が泣けてくる。

「んっ？ビル建設の人手急募か。

まあ、ここらへんにもよくザンギヤックがくるからなあ」

出来れば長期的に続けられる仕事が欲しいが、

「贅沢言える状態じゃないしな」

求人の子ラを持って工事現場の事務所へと向かった。

『キツフェツフェツフェ、怯えろっ！逃げ惑えっ！』

「うわああああっつ」

「かいぶつだああああ」

「たすけてえええっつっ」

辺りから悲鳴が聞こえてくる。

逃げてくる人の後ろでは手触がやけについた緑の蛍光色な怪人がゴ  
ーミンを引き連れて周りを破壊しながらやってくる。

「ザンギヤックっ！！」

せっかくバイト見つけたばかりなのに！」

「坊主っ！

そんなこと言ってる場合か！

今は逃げるぞっ！」

「あっ、はい、おやっさん。

って、あぶねえ！

グッ！」

おやっさんを狙って振り下ろされたゴーミンの斧をとっさに柄をつかんで止めるがすぐ隣にいたゴーミンに斧を振り下ろされてこちらもつかんで拮抗状態になる。

「ぼっ、坊主っ！」

おっさんが抜かした腰をあわてて入れながら立とうとしているところに新たなゴーミンが近づいてきているので組み合っている奴らを振り払っておやっさんを襲おうとした奴にとび蹴りをかます。

「おやっさん、俺にかまわず先に行けっ！」

「ばかやるっっ！」

そりゃあ死亡フラグだぞ！」

おやっさん、実は結構余裕あるだろ？

「なあに、大丈夫です。」

すぐに追いつきますから」

「だから、おめえは安心させたいのか死にたいのかどっちなんだよ  
おおおお」

おやつさん、なかなかノリがいいな。

とはいえ、

『キツフェツフェツフェ、地球人の割にはよく動くではないか』

すぐそこに隊長らしき怪人と銃をかまえたゴーミン達が並んでいた。

『冥土の土産だ。』

仲良く死ねっつ！！！』

「ちよっ！？」

それは大人げくないっ！？」

ゴーミンは射撃体勢に入った。

俺はせめてものとおやつさんをかばうように背中を向けた。

『うつてええ！』

ズガガガガッ！！！！！



『グワアアアア』

来るべき痛みはこず、代わりにゴーミン達が火花を散らしながら崩れていった。

そして、横合いから5人の男女が銃を構えながら歩いてきた。

『なんだああ貴様らはあああ！』

「こちとら人探しがうまくいかなかったいらいらしてんだ。

ストレス解消といかせてもらうぜ」

そう言いながら男女は馬鹿でかい携帯と人形を取り出し、

『ゴーカイチェンジっ！』

5人のヒーローへと変身した。

それを俺は複雑な気持ちで見つめる。

「おい、坊主っ！

今のうちに逃げるぞ」

おやっさんの声に我に返りながらおやっさんとともに逃げた。

昔の憧れを背にして。



そのヒーロー、神社でバイト中（前書き）

今回はめっちゃ短い。

まあサクサクなインターバルということで見逃して欲しい。

## そのヒーロー、神社でバイト中

「はあく、最近クビになる周期が早い。

でも自身が原因でクビにならなかったのは初めてかも」

結局ザンギャックがやってきた工事現場はその後あの気持ち悪い怪人が巨大化し、ゴーカイジャーと共に派手に暴れ回ってくれたせいで工事自体が無期限凍結となってしまう、クビになってしまった。

「俺ってば運なさ過ぎ・・・、アパートも追い出されたし。

はあ、新しい仕事探さなきゃ」

そうつぶやきながら俺はとぼとぼと仕事を求めて歩き出した。

「さあ、いらっしやい。

チョコバナナはどうだい？」

あの後、近くの神社でお祭りがあるらしく、その出店の売り子を募集していたので応募し、さらに事情を話してバイト期間中とはいえ寝床もゲットした。

いや、捨てる神あれば拾う神ありってやつだね。

仕事に寝床が同時に手に入って、さらに売り子の仕事もそれなりに  
順調。

『ズガアアアアアンツ!!』

そんなところにまたザンギヤック。

当然、きていた客も神社の人たちも蜘蛛の子を散らすように逃げ惑  
う。

ザンギヤックは逃げる神主さんらしき人を捕まえていた。

『さあ、ここに保管されている海神の大鏡をよこせ』

「わっ、海神の大鏡だと」

捕まった神主さんが青ざめながらザンギヤックの怪人に答える。

なんじゃそりゃ？

ちなみに俺は出店に隠れて状況把握中。

とつか逃げ損ねた。

「なっ、なぜそんなもっつ!?!」

『お前は黙って俺に在処を喋ればいいのだ』

ゴーミンに殴られた神主が怯えながら怪人に何かを喋った。

それを聞いたザンギヤツク達は神主さんをおいて、奥の倉へと向かった。

「神主さん、大丈夫ツスか？」

神主さんを抱きかかえて怪我がないか見る。

よし、殴られた後もそこまで酷くないな。

「ああああ、海神の大鏡の力が使われれば、この街どころか日本が・・・沈む」

「はあっ!？」

「あの大鏡には遙か昔、近海で暴れ回り、あやういく、日本を沈みかけさせた魔物の力が封じ込められているのじゃ」

なんでそんな危ないものがこんな所にあるかなあ!!

「なるほど、ザンギヤツクがこそこそ何をやってると思えばそんなもんを探していやがったか」

気づけば後ろに前回のゴーカイジャー達がいた。

「貴方たちは下がっていてください」

お嬢様っぽい人がそういうので俺は神主さんに肩を貸し、境内から逃げ出した。

境内へと続く長い階段を下りきった頃、急に空が曇りだし、轟音が境内に鳴り響いた。

俺の寢床、大丈夫かな？

## そのヒーロー、保身につき

「俺のねど・・・神社は大丈夫か？」

海神のなんとかかという危険物より神社、というより寢床の心配をして境内に戻ってきた俺。

普段の自分なら絶対戻らなかっただろうが、ここ1週間ホームレス生活で普段通りではない自分が境内へと足を進めていた。

ズガアアアンツツ！！

「くうっ！！」

境内に戻ると大きな爆発と共にヒーロー達・・・ゴーカイジャー達が吹き飛ばされていた。

どうやら神主さんを脅していた怪人が放った怪光線にやられたらしい。

その怪人も逃げる前とは様子が異なって、海蛇のような形になっている上になにやら青白いオーラのようなモノを纏っていた。

恐らく海神のなんとかかという危険物によってパワーアップしたのだろっつ。



というか姿形まで変わるなんて変わりすぎだろ。

一応摩訶不思議の怪人じゃなくてれっきとしたどっかの種族の宇宙人だろ？

まあ地球人の俺からしたら結局怪人は怪人のままだけど。

そんな考察をしているうちにゴーカイジャー達はパワーアップした怪人によって劣勢に追い込まれていた。

怪人が怪光線を放ち、爆炎と共にゴーカイジャーが吹き飛ばされる。

「あつ」

草陰で隠れながら応援しているうちに気づいた。

そういえば逃げてきたからガス栓しまつてねえ。

ちゃんと切つとかないともしかしたら引火して寝床が燃えてしまうかも。

「それだけは・・・、それだけはだめだ」

毎日しっかり三食、毎日屋根とお布団のある睡眠。

この天国は手放せない！

俺はガス栓を絞めるべくスニーキングミッションを開始した。

俺が慌てて神社の生活スペースへ向かい、ガス栓をすべて閉じている間にゴーカイジャー達の戦闘も佳境へとなっていた。

「キヤアアアアツッ!!」

ちょうど住居スペースの方向に向かってピンク色のゴーカイジャー、ゴウカイピンクが吹き飛ばされた。

「アィムっ!!」

他のゴーカイジャーが慌ててフォーローしようとするが遅かった。

『まずはお前から地獄へ送ってやるっ!!』

怪人がゴウカイピンクに向かって手をかざす。

すぐに手に光が集まり怪人の声と共に光の奔流がながれ、大爆発がおこった。

「アッ、アィムウウウツッ!!」

『がっはははっはは、ザンギャックに逆らうからこうなるのだ。』

心配するなすぐにお前達も同じ所へ送ってやる』

そっいいながら残ったゴーカイジャーにむかって手をかざす。

急いで躲そうとするが散々痛めつけられたせいですぐに動けそうにもない。

『終わりだっ！海賊ども！』

再び手に光が集まったところで手に向かって閃光が走り火花が散った。

集中が切れたのか手に集まった光は霧散した。

『誰だっ！』

怪人は先ほどゴウカイピンクを葬った後に残る煙にむかって吠えた。

先ほどの閃光はあの煙の中から確かに飛んできた。

確かにゴウカイピンクは先ほどの攻撃で死んだはず。

ならば誰が。

怪人が煙をにらみつけているとすぐに人影が現れた。

銀色のスーツ、銀と黒であしらわれたヘルメット。

なによりヘルメットには錨のマーク。

スーツの胸にはゴウカイジャーの証であるドクロのマークが描かれ、手には銃のようなモノを持っていた。

「まさか、マーベラス」

「アイツが銀色の凄い奴か？」

『貴様、海賊どもの仲間かつ！』

「いやっ」

銀色の戦士は一度空を見上げてから視線を怪人に戻すと手に持っていた銃を槍に変形させ、矛先を怪人に向けて言い放った。

「寝場所を選ばない男シルバ、覚えとけ」

そのヒーロー、保身につき（後書き）

そういえば名前出してないな。

まあ分かるよね？知ってる人は。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2694y/>

---

そのヒーロー、ただいま就活中

2011年11月6日04時15分発行